

往診の女医さんは、二人きりの診察でだけ熱を上げる――療養の夜、白衣を脱いだ年上の先生――

穏やかで隙のない訪問診療の先生が、療養中の年下の前でだけ、医師の顔を解いていく
静かな純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

藤代^{ふじしろ}冴子^{さえこ}という医師を、患者は誰もが「落ち着いた先生」だと言う。

訪問診療のかばんを提げて玄関に立つとき、彼女はいつも涼やかで、丁寧で、隙がない。熱に浮かされた老人にも、不安げな家族にも、同じ静かな声で言葉をかける。この界限で、藤代先生に診てもらえるなら安心だ、と言わない者はいない。

——その同じ人が今、俺の部屋の薄明かりのなかで、別人みたいに息を乱している。夜の十時を回った寝室は、枕もとの小さな灯りだけが点っていた。雨戸の隙間を、遠くの車のライトが一度だけ滑って、消える。アパートの外はもう寝静まって、この部屋でいま何が起きているか、知る者は誰もいない。

昼間の冴子を思い浮かべる。白衣の襟を正し、聴診器を耳にあて、こちらの胸の音に静かに耳を澄ます横顔。脈をとる指は冷たく、的確で、一度も迷わない。誰に対しても穏やかで、頼れて、非の打ちどころのない先生。

その同じ手が、今は俺の頬を、すぐるように包んでいる。脈をとるときの冷たく的確な指は、今夜にかぎって、ほのかに汗ばみ、熱を孕んでいた。

「……悠真くん」

いつもうなじでまとめている黒髪は、今はすっかりほどけて、白い肩に幾筋も流れていた。涼やかな切れ長の目もととは潤んで、診察室で見せる凜とした硬さはどこにもない。



——ここから先は製品版でお楽しみください——